CHAPTER 18

次の日、ハリーはロンとハーマイオニーに、 ただし二人別々に、ダンブルドアの宿題を打 ち明けた。

ハーマイオニーが相変わらず、軽蔑の眼差し を投げる瞬間以外は、ロンと一緒にいること を拒んでいたからだ。

ロンは、ハリーならスラグホーンのことは楽 勝だと考えていた。

「あいつは君に触れ込んでる」s。

朝食の席で、フォークに刺した玉子焼きの大きな塊を気楽に振りながら、ロンが言った。

「君が頼めばどんなことだって断りやしないだろ? お気に入りの魔法薬の王子様だもの。 今日の午後の授業のあとにちょっと残って、 聞いてみろよ |

しかし、ハーマイオニーの意見はもっと悲観 的だった。

「ダンブルドアが聞き出せなかったのなら、 スラグホーンはあくまで真相を隠すつもりに 違いないわ」

休み時間中、人気のない雪の中庭での立ち話で、ハーマイオニーが低い声で言った。

「ホークラックス······ホークラックス······聞 いたこともないわ······」

「君が?」

ハリーは落胆した。

ホークラックスがどういう物か、ハーマイオニーなら手がかりを教えてくれるかもしれないと期待していたのだ。

「相当高度な、闇の魔術に違いないわ。そうじゃなきゃ、ヴォルデモートが知りたがるはずないでしょう? ハリー、その情報は、一筋縄じゃ聞き出せないと思うわよ。スラグホーンには十分慎重に持ちかけないといけないわ。ちゃんと戦術を考えて……」

「ロンは、今日の午後の授業のあと、ちょっと残ればいいっていう考えだけど……」

「あら、まあ、もしウォン ウォンがそう考えるんだったら、そうしたはうがいいでしょ」ハーマイオニーはたちまちメラメラと燃え上がった。

「なにしろ、ウォン ウォンの判断は一度だって間違ったことがありませんからね!

Chapter 18

Birthday Surprises

The next day Harry confided in both Ron and Hermione the task that Dumbledore had set him, though separately, for Hermione still refused to remain in Ron's presence longer than it took to give him a contemptuous look.

Ron thought that Harry was unlikely to have any trouble with Slughorn at all.

"He loves you," he said over breakfast, waving an airy forkful of fried egg. "Won't refuse you anything, will he? Not his little Potions Prince. Just hang back after class this afternoon and ask him."

Hermione, however, took a gloomier view. "He must be determined to hide what really happened if Dumbledore couldn't get it out of him," she said in a low voice, as they stood in the deserted, snowy courtyard at break. "Horcruxes ... Horcruxes ... I've never even heard of them. ..."

"You haven't?" Harry was disappointed; he had hoped that Hermione might have been able to give him a clue as to what Horcruxes were.

"They must be really advanced Dark Magic, or why would Voldemort have wanted to know about them? I think it's going to be difficult to get the information, Harry, you'll have to be very careful about how you approach Slughorn, think out a strategy. ..."

"Ron reckons I should just hang back after Potions this afternoon. ..."

"Oh, well, if *Won-Won* thinks that, you'd better do it," she said, flaring up at once. "After all, when has *Won-Won's* judgment ever been

「ハーマイオニー、いい加減に--」

「お断りよ! |

いきり立ったハーマイオニーは、踝まで雪に 埋まったハリーをひとり残し、荒々しく立ち 去った。

しかし、実際ハーマイオニーの言う通りだと ハリーには解っていた。

修正してまで見せたくない記憶をそう簡単に 言ってくれるわけはないのだ。

近ごろの魔法薬のクラスは、ハリー、ロン、ハーマイオニーが同じ作業テーブルを使うというだけで居心地悪かった。

今日のハーマイオニーは、自分の大鍋をテーブルの向こう端のアニーの近くまで移動し、 ハリーとロンの両方を無視していた。

「君は何をやらかしたんだ?」

ハーマイオニーのつんとした横顔を見ながら、ロンがボソボソとハリーに聞いた。

ハリーが答える前に、スラグホーンが教室の 前方から静粛にと呼びかけた。

「静かに、みんな静かにして! さあ、急がないと、今日はやることがたくさんある! 『ゴルパロットの第三の法則』——誰か言える者は——? ああ、ミス グレンジャーだね、勿論 |

ハーマイオニーは猛烈なスピードで暗諭した。

「『ゴルバロットの第三の法則』とは混合毒薬の解毒剤の成分は毒薬の各成分に対する解毒剤の成分の総和より大きい」

「そのとおり!」スラグホーンがニッコリした。

「グリフィンドールに十点! さて、『ゴルバロットの第三の法則』が真であるなら……」ハリーは、「ゴルバロットの第三の法則」が真であるというスラグホーンの言葉を鵜呑みにすることにした。

なにしろチンプンカンプンだったからだ。 スラグホーンの次の説明も、ハマイオニー以 外は誰もついていけないようだった。

「……ということは、勿論、『スカーピンの暴露呪文』により魔法毒薬の成分を正確に同定できたと仮定すると、我々の主要な目的は、これらの全部の成分それ自体の解毒剤を

faulty?"

"Hermione, can't you —?"

"No!" she said angrily, and stormed away, leaving Harry alone and ankle-deep in snow.

Potions lessons were uncomfortable enough these days, seeing as Harry, Ron, and Hermione had to share a desk. Today, Hermione moved her cauldron around the table so that she was close to Ernie, and ignored both Harry and Ron.

"What've *you* done?" Ron muttered to Harry, looking at Hermione's haughty profile.

But before Harry could answer, Slughorn was calling for silence from the front of the room.

"Settle down, settle down, please! Quickly, now, lots of work to get through this afternoon! Golpalott's Third Law ... who can tell me —? But Miss Granger can, of course!"

Hermione recited at top speed: "Golpalott's-Third-Law-states-that-the-antidote-for-a-blended-poison-will-be-equal-to-more-than-the-sum-of-the-antidotes-for-each-of-the-separate-components."

"Precisely!" beamed Slughorn. "Ten points for Gryffindor! Now, if we accept Golpalott's Third Law as true ..."

Harry was going to have to take Slughorn's word for it that Golpalott's Third Law was true, because he had not understood any of it. Nobody apart from Hermione seemed to be following what Slughorn said next either.

"... which means, of course, that assuming we have achieved correct identification of the potion's ingredients by Scarpin's Revelaspell, our primary aim is not the relatively simple one of selecting antidotes to those ingredients それぞれ選び出すという比較的単純なものではなく、追加の成分を見つけ出すことであり、その成分は、ほとんど錬金術とも言える工程により、これらのばらばらな成分を変容せしめーー」

ハリーの横で、ロンは口を半分開け、真新しい自分の「上級魔法薬」の教科書にぼんやり落書きをしていた。授業がさっぱりわからない場合に、ハーマイオニーの助けを求めるということが、いまはもうできないのに、ロンはしょっちゅうそれを忘れていた。

「……であるからして」スラグホーンの説明 が終わった。

「前に出てきて、私の机からそれぞれ薬瓶を一本ずつ取っていきなさい。授業が終わるまでに、その瓶に入っている毒薬に対する解毒剤を調合すること。がんばりなさい。保護手袋を忘れないように!」

ハーマイオニーが、席を立ってスラグホーン の机まで半分の距離を歩いたころ、ほかの生 徒はやっと、行動を開始しなければならない ことに気がついた。

ハリー、ロン、アーニーがテーブルに戻ったときには、ハーマイオニーはすでに薬瓶の中身を自分の大鍋に注ぎ入れ、鍋の下に火を点けていた。

「今回はプリンスがあんまりお役に立たなくて、残念ね、ハリー」体を起こしながら、ハーマイオニーが朗らかに言った。

「こんどは、この原理を理解しないといけないもの。近道もカンニングもなし!」

ハリーはイライラしながら、スラグホーンの 机から持ってきた瓶のコルク栓を抜き、けば けばしいピンク色の毒薬を犬鍋に空けて、下 で火を焚いた。次は何をするやら、ハリーに はさっぱりわからなかった。ロンをちらりと 見ると、ハリーがやったことを逐一まねした あげく、ボケーッと突っ立っているだけだっ た。

「ほんとにプリンスのヒントはないのか?」 ロンが、ハリーにブツブツ言った。

ハリーは頼みの綱の「上級魔法薬」を引っぱ り出し、解毒剤の章を開いた。

そこには、ハーマイオニーが暗論した言葉と 一言し旬違わない、「ゴルバロットの第三の in and of themselves, but to find that added component that will, by an almost alchemical process, transform these disparate elements —"

Ron was sitting beside Harry with his mouth half open, doodling absently on his new copy of *Advanced Potion-Making*. Ron kept forgetting that he could no longer rely on Hermione to help him out of trouble when he failed to grasp what was going on.

"... and so," finished Slughorn, "I want each of you to come and take one of these phials from my desk. You are to create an antidote for the poison within it before the end of the lesson. Good luck, and don't forget your protective gloves!"

Hermione had left her stool and was halfway toward Slughorn's desk before the rest of the class had realized it was time to move, and by the time Harry, Ron, and Ernie returned to the table, she had already tipped the contents of her phial into her cauldron and was kindling a fire underneath it.

"It's a shame that the Prince won't be able to help you much with this, Harry," she said brightly as she straightened up. "You have to understand the principles involved this time. No shortcuts or cheats!"

Annoyed, Harry uncorked the poison he had taken from Slughorn's desk, which was a garish shade of pink, tipped it into his cauldron, and lit a fire underneath it. He did not have the faintest idea what he was supposed to do next. He glanced around at Ron, who was now standing there looking rather gormless, having copied everything Harry had done.

"You sure the Prince hasn't got any tips?" Ron muttered to Harry.

法則|が載っていた。

しかし、それがどういう意味なのか、プリンスの手書きによる明快な書き込みは一つもない。

プリンスは、ハーマイオニーと同じょうに、 苦もなくこの法則が理解できたらしい。

「ゼロ」ハリーが暗い声で言った。

ハーマイオニーがこんどは、犬飼の上で熱心 に杖を振っていた。

残念なことに、ハーマイオニーの使っている 呪文をまねすることはできなかった。

ハーマイオニーはもう無言呪文に熟達し、一 言も発する必要がなかったからだ。

しかし、アーニー マクミランは、自分の大鍋に向かって「スペシアリス レペリオ<化けの皮、剥がれよ>」と小声で唱えていた。それがいかにも迫力があったので、ハリーもロンもアーニーのまねをすることにした。 五分も経たないうちに、クラス一番の魔法薬

五分も経たないうちに、クラス一番の魔法薬 作りの評判がガラガラと崩れる音が、ハリー の耳元で聞こえた。

スラグホーンは地下牢教室を一回りしながら、期待を込めてハリーの大鍋を覗き込み、いつものように歓声を上げようとした。

ところが、腐った卵の臭いに閉口して、咳き 込みながら慌てて首を引っ込めた。

ハーマイオニーの得意げな顔といったらなかった。

魔法薬の授業で毎回負けていたのが、嫌でたまらなかったのだ。いまやハーマイオニーは、摩討不思議にも分離した毒薬の成分を、クリスタルの薬瓶十本に小分けして、静かに注ぎ込んでいた。

癪な光景から目を逸らしたい一心で、ハリーはプリンスの本を覗き込み、躍起になって数ページめくった。

すると、あるではないか。解毒剤を列挙した 長いリストを横切って、走り書きがあった。

ペゾアール石を喉から押し込むだけ

ハリーはしばらくその文字を見つめていた。 ずいぶん前に、ベゾアール石のことを聞いた ことがあるのでは?スネイプが、最初の魔法 薬の授業で口にしたのでは? Harry pulled out his trusty copy of Advanced Potion-Making and turned to the chapter on antidotes. There was Golpalott's Third Law, stated word for word as Hermione had recited it, but not a single illuminating note in the Prince's hand to explain what it meant. Apparently the Prince, like Hermione, had had no difficulty understanding it.

"Nothing," said Harry gloomily.

Hermione was now waving her wand enthusiastically over her cauldron. Unfortunately, they could not copy the spell she was doing because she was now so good at nonverbal incantations that she did not need to say the words aloud. Ernie Macmillan, however, was muttering, "Specialis Revelio!" over his cauldron, which sounded impressive, so Harry and Ron hastened to imitate him.

It took Harry only five minutes to realize that his reputation as the best potion-maker in the class was crashing around his ears. Slughorn had peered hopefully into his cauldron on his first circuit of the dungeon, preparing to exclaim in delight as he usually did, and instead had withdrawn his head hastily, coughing, as the smell of bad eggs overwhelmed him. Hermione's expression could not have been any smugger; she had loathed being outperformed in every Potions class. She was now decanting the mysteriously separated ingredients of her poison into ten different crystal phials. More to avoid watching this irritating sight than anything else, Harry bent over the Half-Blood Prince's book and turned a few pages with unnecessary force.

And there it was, scrawled right across a long list of antidotes:

「ベゾアール石は山羊の胃から取り出す石で、たいていの毒に対する解轟剤となる」ゴルバロットの問題に対する答えではなかったし、スネイプがまだ魔法薬の先生だったら、ハリーは絶対そんなことはしなかっただろうが、ここいちばんの瀬戸際だ。

ハリーは急いで材料棚に近づき、ユニコーン の角や絡み合った干薬草を押しのけて棚の中 を引っ掻き回し、いちばん奥にある小さな紙 の箱を見つけた。

箱の上に「ベゾアール」と書き殴ってあった。

ハリーが箱を開けるとほとんど同時に、スラグホーンが、「みんな、あと二分だ!」と声をかけた。

箱の中には半ダースほどの萎びた茶色い物が入っていて、石というよく干乾びた腎臓のようだった。

ハリーはその一つをつかみ、箱を棚に戻して 鍋のところまで急いで戻った。

「時間だ……やめ!」スラグホーンが楽しげ に呼ばわった。

「さーて、成果を見せてもらおうか! プレーズ……何を見せてくれるかな?」

スラグホーンはゆっくりと教室を回り、さまざまな解毒剤を調べて歩いた。課題を完成させた生徒は誰もいなかった。

ただ、ハーマイオニーは、スラグホーンがやって来るまでに、あと数種類の成分を瓶に押し込もうとしていた。

ロンは完全に諦めて、自分の大鍋から立ち昇る腐った臭いを吸い込まないようにしている だけだった。

ハリーは少し汗ばんだ手に、ベゾアール石を 握りしめてじっと待った。

スラグホーンは、最後にハリーたちのテーブ ルに来た。

アーニーの解毒剤をフンフンと嗅ぎぎ、顔をしかめてロンのほうに移動した。

ロンの大鍋にも長居はせず、吐き気を催した ようにすばやく後退った。

「さあ君の番だ、ハリー」スラグホーンが言った。

「何を見せてくれるね?」 ハリーは手を差し出した。 *Just shove a bezoar down their throats.*

Harry stared at these words for a moment. Hadn't he once, long ago, heard of bezoars? Hadn't Snape mentioned them in their first-ever Potions lesson? "A stone taken from the stomach of a goat, which will protect from most poisons."

It was not an answer to the Golpalott problem, and had Snape still been their teacher, Harry would not have dared do it, but this was a moment for desperate measures. He hastened toward the store cupboard and rummaged within it, pushing aside unicorn horns and tangles of dried herbs until he found, at the very back, a small cardboard box on which had been scribbled the word bezoars.

He opened the box just as Slughorn called, "Two minutes left, everyone!" Inside were half a dozen shriveled brown objects, looking more like dried-up kidneys than real stones. Harry seized one, put the box back in the cupboard, and hurried back to his cauldron.

"Time's ... UP!" called Slughorn genially. "Well, let's see how you've done! Blaise ... what have you got for me?"

Slowly, Slughorn moved around the room, examining the various antidotes. Nobody had finished the task, although Hermione was trying to cram a few more ingredients into her bottle before Slughorn reached her. Ron had given up completely, and was merely trying to avoid breathing in the putrid fumes issuing from his cauldron. Harry stood there waiting, the bezoar clutched in a slightly sweaty hand.

Slughorn reached their table last. He sniffed Ernie's potion and passed on to Ron's with a

手のひらにベゾアール石が載っていた。 スラグホーンは、まるまる十秒もそれを見つ めていた。

怒鳴りつけられるかもしれないと、ハリーは 一瞬そう思った。

ところがスラグホーンは、のけ反って大笑い した。

「まったく、いい度胸だ!」

スラグホーンは、ベゾアール石を高く掲げて クラス中に見えるようにしながら太い声を響 かせた。

「ああ、母親と同じだ……いや、君に落第点をつけることはできない……ベゾアール右はたしかに、ここにある魔法薬すべての解毒剤として効く!」

ハーマイオニーは、汗まみれで鼻に煤をくっつけて、憤懣やる方ない顔をしていた。

五十二き種類もの成分に、ハーマイオニーの 髪の毛一塊まで入って半分出来上がった解毒 剤が、スラグホーンの背後でゆっくり泡立っ ていたが、スラグホーンはハリーしか眼中に なかった。

「それで、あなたは自分ひとりでベゾアール 石を考えついたのね、ハリー、そうなの ね?」

ハーマイオニーが歯乳りしながら聞いた。 「それこそ、真の魔法薬作りに必要な個性的 創造力というものだ!」

ハリーが何も答えないうちに、スラグホーン がうれしそうに言った。

「母親もそうだった。魔法薬作りを直感的に把掘する生徒だった。間違いなくこれは、リリーから受け継いだものだ……そう、ハリー、そのとおり、ベゾアール石があれば、もちろんそれで事がすむ……ただし、すべてに効くわけではないし、かなり手に入りにくい物だから、解毒剤の調合の仕方は、知っておく価値がある……」

教室中でただ一人、ハーマイオニーより怒っているように見えたのはマルフォイだった。ロープに猫の反吐のようなものが垂れこぼれているマルフォイを見て、ハリーは溜飲が下がった。

ハリーがまったく作業せずにクラスで一番に なったことに、二人のどちらも、怒りをぶち grimace. He did not linger over Ron's cauldron, but backed away swiftly, retching slightly.

"And you, Harry," he said. "What have you got to show me?"

Harry held out his hand, the bezoar sitting on his palm.

Slughorn looked down at it for a full ten seconds. Harry wondered, for a moment, whether he was going to shout at him. Then he threw back his head and roared with laughter.

"You've got nerve, boy!" he boomed, taking the bezoar and holding it up so that the class could see it. "Oh, you're like your mother. ... Well, I can't fault you. ... A bezoar would certainly act as an antidote to all these potions!"

Hermione, who was sweaty-faced and had soot on her nose, looked livid. Her half-finished antidote, comprising fifty-two ingredients, including a chunk of her own hair, bubbled sluggishly behind Slughorn, who had eyes for nobody but Harry.

"And you thought of a bezoar all by yourself, did you, Harry?" she asked through gritted teeth.

"That's the individual spirit a real potion-maker needs!" said Slughorn happily, before Harry could reply. "Just like his mother, she had the same intuitive grasp of potion-making, it's undoubtedly from Lily he gets it. ... Yes, Harry, yes, if you've got a bezoar to hand, of course that would do the trick ... although as they don't work on everything, and are pretty rare, it's still worth knowing how to mix antidotes. ..."

The only person in the room looking angrier than Hermione was Malfoy, who, Harry was まける間もなく、終業ベルが鳴った。

「荷物をまとめて!」スラグホーンが言った。

「それと、生意気千万に対して、グリフィンドールにもう十点!」スラグホーンはクスクス笑いながら、地下牢教室の前にある自分の机によたよたと戻った。

ハリーは、カバンを片付けるのにしては長すぎる時間をかけ、ぐずぐずとあとに残っていた。

ロンもハーマイオニーも、がんばれと声をか けもせずに教室を出ていった。

二人ともかなりイライラしているようだった。

最後に、ハリーとスラグホーンだけが教室に 残った。

「ほらほら、ハリー、次の授業に遅れるよ」 スラグホーンが、ドラゴン革のブリーフケー スの金の留め金をバナンと締めながら、愛想 よく言った。

「先生」

否応なしに記憶の場面でのヴォルデモートのことを思い出しながら、ハリーが切り出した。

「お伺いしたいことがあるんです」

「それじゃ、遠慮なく聞きなさい、ハリー、 遠慮なく」

「先生、ご存知でしょうか……ホークラック スのことですが?」

スラグホーンが凍りついた。丸顔が見る見る 陥没していくようだった。

スラグホーンは唇を舐め、かすれ声で言った。

「何と言ったのかね?」

「先生、ホークラックスのことを、何かご存 知でしょうかと伺いました。あの--」

「ダンブルドアの差し金だな」スラグホーン が呟いた。

スラグホーンの声ががらりと変わった。 もはや愛想のよさは吹っ飛び、衝撃で怯えた 声だった。

震える指で胸ポケットから、ようやくハンカチを引っぱり出し、額の汗を拭った。

「ダンブルドアが君にあれを見せたのだろう ーーあの記憶を」スラグホーンが言った。 pleased to see, had spilled something that looked like cat-sick over himself. Before either of them could express their fury that Harry had come top of the class by not doing any work, however, the bell rang.

"Time to pack up!" said Slughorn. "And an extra ten points to Gryffindor for sheer cheek!"

Still chuckling, he waddled back to his desk at the front of the dungeon.

Harry dawdled behind, taking an inordinate amount of time to do up his bag. Neither Ron nor Hermione wished him luck as they left; both looked rather annoyed. At last Harry and Slughorn were the only two left in the room.

"Come on, now, Harry, you'll be late for your next lesson," said Slughorn affably, snapping the gold clasps shut on his dragon-skin briefcase.

"Sir," said Harry, reminding himself irresistibly of Voldemort, "I wanted to ask you something."

"Ask away, then, my dear boy, ask away...."

"Sir, I wondered what you know about ... about Horcruxes?"

Slughorn froze. His round face seemed to sink in upon itself. He licked his lips and said hoarsely, "What did you say?"

"I asked whether you know anything about Horcruxes, sir. You see —"

"Dumbledore put you up to this," whispered Slughorn. His voice had changed completely. It was not genial anymore, but shocked, terrified. He fumbled in his breast pocket and pulled out a handkerchief, mopping his sweating brow. "Dumbledore's shown you that — that memory. Well? Hasn't he?"

「え? そうなんだろう?」

「はい」ハリーは、嘘をつかないほうがいい と即座に判断した。

「そうだろう。勿論」

スラグホーンは蒼白な顔をまだハンカチで拭いながら、低い声で言った。

「勿論……まあ、あの記憶を見たのなら、ハリー、私がいっさい何も知らないことはわかっているだろうーーいっさい何もーー」スラグホーンは同じ言葉を繰り返し強調した。

「ホークラックスのことなど」

スラグホーンは、ドラゴン革のブリーフケースを引っつかみ、ハンカチをボケッーに押し 込み直し、地下牢教室のドアに向かってとっ とと歩き出した。

「先生」ハリーは必死になった。

「僕はただ、あの記憶に少し足りないところがあるのではと--」

「そうかね?」スラグホーンが言った。

「それなら、君が間違っとるんだろう? 問達っとる! 」

最後の言葉は怒鳴り声だった。

ハリーにそれ以上一言も言わせず、スラグホーンは地下牢教室のドアをバタンと閉めて出ていった。

ロンもハーマイオニーも、ハリーの話す惨憺 たる結果に、さっぱり同情してくれなかっ た。

ハーマイオニーは、きちんと作業もしないで 勝利を得たハリーのやり方に、まだ煮えくり 返っていた。

ロンは、ハリーが自分にもこっそりベゾアール石を渡してくれなかったことを恨んでいた。

「二人そろって同じことをしたら、間抜けじゃないか!」ハリーは苛立った。

「いいか。僕は、ヴォルデモートのことを聞き出せるように、あいつを懐柔する必要があったんだ。おい、しゃんとしろよ!」

ロンがその名を開いたとたんビクリとしたので、ハリーはますますイライラした。

失敗はするし、ロンとハーマイオニーの態度 も態度だし、ハリーはむかっ腹を立てなが ら、それから数日、スラグホーンに次はどう "Yes," said Harry, deciding on the spot that it was best not to lie.

"Yes, of course," said Slughorn quietly, still dabbing at his white face. "Of course ... well, if you've seen that memory, Harry, you'll know that I don't know anything — anything" — he repeated the word forcefully — "about Horcruxes."

He seized his dragon-skin briefcase, stuffed his handkerchief back into his pocket, and marched to the dungeon door.

"Sir," said Harry desperately, "I just thought there might be a bit more to the memory —"

"Did you?" said Slughorn. "Then you were wrong, weren't you? WRONG!"

He bellowed the last word and, before Harry could say another word, slammed the dungeon door behind him.

Neither Ron nor Hermione was at all sympathetic when Harry told them of this disastrous interview. Hermione was still seething at the way Harry had triumphed without doing the work properly. Ron was resentful that Harry hadn't slipped him a bezoar too.

"It would've just looked stupid if we'd both done it!" said Harry irritably. "Look, I had to try and soften him up so I could ask him about Voldemort, didn't I? Oh, will you *get a grip*!" he added in exasperation, as Ron winced at the sound of the name.

Infuriated by his failure and by Ron's and Hermione's attitudes, Harry brooded for the next few days over what to do next about Slughorn. He decided that, for the time being, he would let Slughorn think that he had forgotten all about Horcruxes; it was surely best to lull him into a false sense of security

いう手を打つべきかを考え込んだ。

そして、当分の間、スラグホーンに、ハリーがホークラックスのことなど忘れ果てたと思い込ませることにした。

再攻撃を仕掛ける前に、スラグホーンがもう 安泰だと思い込むようになだめるのが、最上 の策に違いない。

ハリーが二度とスラグホーンに質問しなかったので、魔法柴の先生は、いつものようにハリーをかわいがる態度に戻り、その間題は忘れたかのようだった。

スラグホーンが次に小パーティを開くときには、たとえクィディッチの練習予定を変えてでも逃すまいと決心し、ハリーは招待されるのを待った。残念ながら、招待状は来なかった。

ハリーは、ハーマイオニーやジニーにも確かめたが、どちらも招待状を受け取っていなかったし、二人の知るかぎり、ほかに誰も受け取った者はいなかった。

スラグホーンは見かけより忘れっぽくないのかもしれないし、再び質問する機会を絶対に与えまいとしているのではないか、とハリーは考えざるをえなかった。

一方、ホグワーツ図書室は、ハーマイオニー の記憶にあるかぎり初めて、答えを出してく れなかった。

それがあまりにもショックで、ハーマイオニーは、ハリーがベゾアール石でズルをしたと 苛立っていたことさえ忘れてしまった。

「ホークラックスが何をする物か、ひとっつ も説明が見当たらないの!」

ハーマイオニーがハリーに言った。

before returning to the attack.

When Harry did not question Slughorn again, the Potions master reverted to his usual affectionate treatment of him, and appeared to have put the matter from his mind. Harry awaited an invitation to one of his little evening parties, determined to accept this time, even if he had to reschedule Quidditch practice. Unfortunately, however, no such invitation arrived. Harry checked with Hermione and Ginny: Neither of them had received an invitation and nor, as far as they knew, had anybody else. Harry could not help wondering whether this meant that Slughorn was not quite as forgetful as he appeared, simply determined to give Harry no additional opportunities to question him.

Meanwhile, the Hogwarts library had failed Hermione for the first time in living memory. She was so shocked, she even forgot that she was annoyed at Harry for his trick with the bezoar.

"I haven't found one single explanation of what Horcruxes do!" she told him. "Not a single one! I've been right through the restricted section and even in the most horrible books, where they tell you how to brew the most gruesome potions — nothing! All I could find was this, in the introduction to Magick Moste Evile — listen — 'Of the Horcrux, wickedest of magical inventions, we shall not speak nor give direction. ...' I mean, why mention it then?" she said impatiently, slamming the old book shut; it let out a ghostly wail. "Oh, shut up," she snapped, stuffing it back into her bag.

The snow melted around the school as February arrived, to be replaced by cold,

ハーマイオニーはピシャリと言って、本を元 のカバンに詰め込んだ。

二月になり、学校の周りの雪が溶け出して、 冷たく陰気でじめじめした季節になった。ど んよりした灰紫の雲が城の上に低く垂れ込 め、間断なく降る冷たい雨で、芝生は滑りや すく泥んこだった。

その結果、六年生の「姿現わし」第一回練習は、校庭でなく大広間で行われることになった。

通常の授業とかち合わないように、練習時間 は土曜日の朝に予定された。

ハリーとハーマイオニーが大広間に来てみると(ロンはラベンダーと一緒に来ていた)、長テーブルがなくなっていた。高窓に雨が激しく打ちつけ、魔法のかかった大井は暗い渦を巻いていた。

生徒たちは、各寮の寮監であるマクゴナガル、スネイプ、フリットウィック、スプラウトの諸先生方と、魔法省から派遣された「姿現わし」の指導官と思われる、小柄な魔法使いの前に集まった。

指導官は、奇妙に色味のない随毛に霞のょうな髪で、一陣の風にも吹き飛ばされてしまい そうな実在感のない雰囲気だった。

しょっちゅう消えたり現れたりしていたから、何かしらん実体がなくなってしまったのだろうか、こういう儚げな体型が、姿を消したい人には理想的なのだろうか、とハリーは考えた。

「みなさん、おはよう」

生徒が全員集まり、寮監が静粛にと呼びかけ たあと、魔法省の指導官が挨拶した。

「私はウィルキー トワイクロスです。これから十二週間、魔法省『姿現わし』指導官を務めます。その期間中、みなさんが『姿現わし』の試験に受かるように訓練するつもりですーー

「マルフォイ、静かにお聞きなさい!」マクゴナガル先生が叱りつけた。

みんながマルフォイを振り返った。

マルフォイは鈍いピンク色に頬を染め、怒り狂った顔で、それまでヒソヒソ声で口論していたらしいクラップから離れた。

dreary wetness. Purplish-gray clouds hung low over the castle and a constant fall of chilly rain made the lawns slippery and muddy. The upshot of this was that the sixth years' first Apparition lesson, which was scheduled for a Saturday morning so that no normal lessons would be missed, took place in the Great Hall instead of in the grounds.

When Harry and Hermione arrived in the Hall (Ron had come down with Lavender), they found that the tables had disappeared. Rain lashed against the high windows and the enchanted ceiling swirled darkly above them as they assembled in front of Professors McGonagall, Snape, Flitwick, and Sprout the Heads of Houses — and a small wizard whom Harry took to be the Apparition instructor from the Ministry. He was oddly colorless, with transparent eyelashes, wispy hair, and an insubstantial air, as though a single gust of wind might blow him away. Harry wondered whether constant disappearances and reappearances had somehow diminished his substance, or whether this frail build was ideal for anyone wishing to vanish.

"Good morning," said the Ministry wizard, when all the students had arrived and the Heads of Houses had called for quiet. "My name is Wilkie Twycross and I shall be your Ministry Apparition instructor for the next twelve weeks. I hope to be able to prepare you for your Apparition Tests in this time —"

"Malfoy, be quiet and pay attention!" barked Professor McGonagall.

Everybody looked around. Malfoy had flushed a dull pink; he looked furious as he stepped away from Crabbe, with whom he appeared to have been having a whispered ハリーは急いでスネイプを盗み見た。

スネイプも苛立っていたが、ハリーの見るところ、マルフォイの行儀の悪さのせいというより、ほかの寮の寮監であるマクゴナガルに叱責されたせいではないかと思った。

「--それまでには、みなさんの多くが、試験を受けることができる年齢になっているでしょう|

トワイクロスは何事もなかったかのように話し続けた。

「知ってのとおり、ホグワーツ内では通常 『姿現わし』も『姿くらまし』もできませ ん。校と長先生が、みなさんの練習のため に、この大広間にかぎって、一時間だけ呪縛 を解きました。念を押しますが、この大広間 の外では『姿現わし』はできませんし、試し たりするのも賢明とは言えません」

「それではみなさん、前の人との間を一 五メートル空けて、位置に着いてください」 互いに離れたりぶつかったり、百分の空間から出ろと要求したりで、かなり押し合いへし合いがあった。

寮監が生徒の間を回って、位置につかせたり、言い争いをやめさせたりした。

「ハリー、どこにいくの?」ハーマイオニー が見咎めた。

ハリーは、それには答えず、混雑の中をすば やく縫って歩いていった。

全員がいちばん前に出たがっているレイブンクロー生を位置に着かせょうと、キーキー声を出しているフリットウィック先生のそばを通り過ぎ、ハッフルパフ生を追い立てて並ばせているスプラウト先生を通り越し、アーニーマクミランを避けて、最後に群れのいちばん後ろ、マルフォイの真後ろに首尾ょく場所を占めた。

マルフォイは部屋中の騒ぎに乗じて、反抗的な顔をして一 五メートル離れたところに立っているクラップと、口論を続けていた。

「いいか、あとどのくらいかかるかわからないんだ!」 すぐ後ろにハリーがいることには気づかず、マルフォイが投げつけるように言った。

「考えていたより長くかかっている」クラップが口を開きかけたが、マルフォイはクラッ

argument. Harry glanced quickly at Snape, who also looked annoyed, though Harry strongly suspected that this was less because of Malfoy's rudeness than the fact that McGonagall had reprimanded one of his House.

"— by which time, many of you may be ready to take your tests," Twycross continued, as though there had been no interruption.

"As you may know, it is usually impossible to Apparate or Disapparate within Hogwarts. The headmaster has lifted this enchantment, purely within the Great Hall, for one hour, so as to enable you to practice. May I emphasize that you will not be able to Apparate outside the walls of this Hall, and that you would be unwise to try.

"I would like each of you to place yourselves now so that you have a clear five feet of space in front of you."

There was a great scrambling and jostling as people separated, banged into each other, and ordered others out of their space. The Heads of Houses moved among the students, marshaling them into position and breaking up arguments.

"Harry, where are you going?" demanded Hermione.

But Harry did not answer; he was moving quickly through the crowd, past the place where Professor Flitwick was making squeaky attempts to position a few Ravenclaws, all of whom wanted to be near the front, past Professor Sprout, who was chivying the Hufflepuffs into line, until, by dodging around Ernie Macmillan, he managed to position himself right at the back of the crowd, directly behind Malfoy, who was taking advantage of the general upheaval to continue his argument

プの言おうとしていることを読んだようだった。

「いいか、僕が何をしていようと、クラップ、おまえには関係ない。おまえもゴイルも、言われたとおりにして、見張りだけやっていろ!」

「友達に見張りを頼むときは、僕なら自分の 目的を話すけどな」

ハリーは、マルフォイだけに聞こえる程度の 声で言った。

マルフォイは、さっと杖に手をかけながら、 くるりと後ろ向きになったが、ちょうどその とき、寮監の四人が「静かに!」と大声を出 し、部屋中が再び静かになった。

マルフォイはゆっくりと正面に向き直った。 「どうも」トワイクロスが言った。

「さて、それでは……」

指導官が杖を振ると、たちまち生徒全員の前 に、古くさい木の輪っかが現れた。

「『姿現わし』で覚えておかなければならない大切なこと、は三つの『D』です!」 トワイクロスが言った。

「『集中』、『真剣』、『慎重』!」 「第一のステップ。どこへ行きたいか、しっ

「第一のステップ。とこへ行きたいか、しっかり思い定めること」トワイクロスが言った。

「今回は、輪っかの中です。では『どこへ』 に集中してください」

みんなが周りをちらちら盗み見て、ほかの人も輪っかの中を見つめているかどうかをチェックし、それから急いで言われたとおりにした。

ハリーは、輪っかが丸く取り囲んでいる埃っぽい床を見つめて、ほかのことは何も考えまいとしたが、無理だった。

マルフォイがいったい何のために見張りを立てる必要があるのかを考えてしまうからだ。

「第二のステップ」トワイクロスが言った。

「『どうしても』という気持ちを、目的の空間に集中させる! どうしてもそこに行きたいという決意が、体の隅々にまで溢れるようにする! |

ハリーはこっそりあたりを見回した。

ちょっと離れた左のほうで、アーニー マク ミランが自分の輪っかに意識を集中しょうと with Crabbe, standing five feet away and looking mutinous.

"I don't know how much longer, all right?" Malfoy shot at him, oblivious to Harry standing right behind him. "It's taking longer than I thought it would."

Crabbe opened his mouth, but Malfoy appeared to second-guess what he was going to say. "Look, it's none of your business what I'm doing, Crabbe, you and Goyle just do as you're told and keep a lookout!"

"I tell my friends what I'm up to, if I want them to keep a lookout for me," Harry said, just loud enough for Malfoy to hear him.

Malfoy spun around on the spot, his hand flying to his wand, but at that precise moment the four Heads of House shouted, "Quiet!" and silence fell again. Malfoy turned slowly to face the front again.

"Thank you," said Twycross. "Now then ..."

He waved his wand. Old-fashioned wooden hoops instantly appeared on the floor in front of every student.

"The important things to remember when Apparating are the three D's!" said Twycross. "Destination, Determination, Deliberation!

"Step one: Fix your mind firmly upon the desired *destination*," said Twycross. "In this case, the interior of your hoop. Kindly concentrate upon that destination now."

Everybody looked around furtively to check that everyone else was staring into their hoop, then hastily did as they were told. Harry gazed at the circular patch of dusty floor enclosed by his hoop and tried hard to think of nothing else. This proved impossible, as he couldn't stop するあまり、顔が紅潮していた。

クアッフル大の卵を産み落とそうと力んでいるかのようだった。

ハリーは笑いを噛み殺し、慌てて自分の輪っかに視線を戻した。

「第三のステップ」トワイクロスが声を取り 上げた。

「そして、私が号令をかけたそのときに…… その場で回転する。

無の中に入り込む感覚で、『どういう意図で』行くかを慎重に考えながら動く!いち、に、さんの号令に合わせて、では…-いちーー

ハリーはあたりを見回した。

そんなに急に「姿現わし」をしろと言われて もと、驚愕した顔が多かった。

 $\lceil -- \iota z -- \rfloor$

ハリーはもう一度輪っかに意識を集中しょうとした。

三つの「D」が何だったか、とっくに忘れていた。

「一一さん!」

ハリーはその場で回転したが、バランスを失って転びそうになった。

ハリーだけではなかった。

大広間はたちまち集団よろけ状態になっていた。

ネビルは完全に仰向けに引っくり返っていた。

し方アーニー マクミランは、爪先で回転 し、踊るように輪の中に飛び込んで、一瞬ぞ くぞくしているようだったが、すぐに、自分 を見て大笑いしているディーン トーマスに 気づいた。

「かまわん、かまわん」

トワイクロスはそれ以上のことを期待していなかったようだった。

「輪っかを直して、元の位置に戻って……」 二回目も一回目よりましとは言えず、三回目 も相変わらずダメだった。

四回目になってやっと一騒動起こった。

恐ろしい苦痛の悲鳴が上がり、みんながゾッとして声のほうを見ると、ハッフルパフのスーザン ボーンズが、一 五メートル離れた出発地点に左足を残したまま、輪の中でグラ

puzzling over what Malfoy was doing that needed lookouts.

"Step two," said Twycross, "focus your *determination* to occupy the visualized space! Let your yearning to enter it flood from your mind to every particle of your body!"

Harry glanced around surreptitiously. A little way to his left, Ernie Macmillan was contemplating his hoop so hard that his face had turned pink; it looked as though he was straining to lay a Quaffle-sized egg. Harry bit back a laugh and hastily returned his gaze to his own hoop.

"Step three," called Twycross, "and only when I give the command ... Turn on the spot, feeling your way into nothingness, moving with *deliberation*! On my command, now ... one —"

Harry glanced around again; lots of people were looking positively alarmed at being asked to Apparate so quickly.

Harry tried to fix his thoughts on his hoop again; he had already forgotten what the three D's stood for.

"— THREE!"

Harry spun on the spot, lost balance, and nearly fell over. He was not the only one. The whole Hall was suddenly full of staggering people; Neville was flat on his back; Ernie Macmillan, on the other hand, had done a kind of pirouetting leap into his hoop and looked momentarily thrilled, until he caught sight of Dean Thomas roaring with laughter at him.

"Never mind, never mind," said Twycross dryly, who did not seem to have expected anything better. "Adjust your hoops, please, グラ揺れていた。

寮監たちがスーザンを包囲し、パンパンいう音と紫の煙が上がり、それが消えたあとには、左足と再び合体したスーザンが、怯えきった顔で泣きじゃくっていた。

「『ばらけ』とは、体のあちこちが分離することで」

ウィルキー トワイクロスが平気な顔で言った。

「心が十分に『どうしても』と決意していないときに起こります。継続的に『どこへ』に集中しなければなりません。そして、慌てず、しかし慎重に『どういう意図で』を忘れずに動こと……そうすれば」

トワイクロスは前に進み出て両腕を伸ばし、 その場で優雅に回転してローブの渦の中に消 えたかと思うと、大広間の後ろに再び姿を現 した。

「三つの『D』を忘れないように」トワイク ロスが言った。

「ではもう一度**……**いちーーにーーさんー ー

しかし、一時間経っても、スーザンの「ばらけ」以上におもしろい事件はなかった。

トワイクロスは別に落胆した様子もない。 首のところでマントの紐を結びながら、ただ こう言った。

「では、みなさん、次の土曜日に。忘れないでくださいよ、『集中』、『真剣』、『慎重』!」

そう言うなりトワイクロスが杖を一振りすると、輪っかが全部消えた。トワイクロスはマクゴナガル先生に付き添われて大広間を出ていった。

生徒たちは玄関ホールへと移動し、たちまち おしゃべりが始まった。

「どうだった?」ロンが急いでハリーのほう へやって来て聞いた。

「最後にやったとき、なんだか感じたみたいな気がするなーー両足がジンジンするみたいな |

「スニーカーが小さすぎるんじゃないの、ウ ォン ウォン」

背後で声がして、ハーマイオニーが冷ややか な笑いを浮かべながら、つんけんと二人を追 and back to your original positions. ..."

The second attempt was no better than the first. The third was just as bad. Not until the fourth did anything exciting happen. There was a horrible screech of pain and everybody looked around, terrified, to see Susan Bones of Hufflepuff wobbling in her hoop with her left leg still standing five feet away where she had started.

The Heads of House converged on her; there was a great bang and a puff of purple smoke, which cleared to reveal Susan sobbing, reunited with her leg but looking horrified.

"Splinching, or the separation of random parts," body said Wilkie **Twycross** dispassionately, "occurs when the mind is insufficiently determined. You concentrate continuously upon your destination, and move, without haste, but with deliberation ... thus."

Twycross stepped forward, turned gracefully on the spot with his arms outstretched, and vanished in a swirl of robes, reappearing at the back of the Hall.

"Remember the three D's," he said, "and try again ... one — two — three —"

But an hour later, Susan's Splinching was still the most interesting thing that had happened. Twycross did not seem discouraged. Fastening his cloak at his neck, he merely said, "Until next Saturday, everybody, and do not forget: Destination. Determination. Deliberation."

With that, he waved his wand, Vanishing the hoops, and walked out of the Hall accompanied by Professor McGonagall. Talk broke out at once as people began moving toward the entrance hall.

い越していった。

「僕は何にも感じなかった」ハリーは茶々が 入らなかったかのように言った。

「だけど、いまはそんなことどうでもいいー --

「どういうことだ? どうでもいいって…… 『姿現わし』を覚えたくないのか?」 ロンが信じられないという顔をした。

「ほんとにどうでもいいんだ。僕は飛ぶほう が好きだ」

ハリーは振り返ってマルフォイがどこにいるかを確かめ、玄関ホールに出てから足を早めた。

「頼む、急いでくれ。僕、やりたいことがあるんだ……」

何だかわからないまま、ロンはハリーのあとから、グリフィンドール塔に向かって走った。

途中、ビープズに足止めを食った。

ビープズが五階のドアを塞いで、自分のズボンに火をつけないと開けてやらないと、通せん坊していたのだ。

しかし二人は、後戻りして、確実な近道の一つを使った。

五分もしないうちに、二人は肖像画の穴をく ぐつていた。

「さあ、何するつもりか、教えてくれるか?」ロンが少し息を切らしながら聞いた。 「上で」

ハリーは談話室を横切り、先に立って男子寮 へのドアを通りながら言った。

ハリーの予想どおり、寝室には誰もいなかった。

ハリーはトランクを開けて、引っ掻き回した。

ロンはイライラしながらそれを見ていた。 「ハリー······」

「マルフォイがクラップとゴイルを見張りに使ってる。クラップとさっき口論していた。 僕は知りたいんだ……あった」

見つけたのは、四角に畳んだ羊皮紙で、見かけは白紙だ。

ハリーはそれを広げて、杖の先でコツコツ叩いた。

"How did you do?" asked Ron, hurrying toward Harry. "I think I felt something the last time I tried — a kind of tingling in my feet."

"I expect your trainers are too small, Won-Won," said a voice behind them, and Hermione stalked past, smirking.

"I didn't feel anything," said Harry, ignoring this interruption. "But I don't care about that now —"

"What d'you mean, you don't care? Don't you want to learn to Apparate?" said Ron incredulously.

"I'm not fussed, really, I prefer flying," said Harry, glancing over his shoulder to see where Malfoy was, and speeding up as they came into the entrance hall. "Look, hurry up, will you, there's something I want to do. ..."

Perplexed, Ron followed Harry back to the Gryffindor Tower at a run. They were temporarily detained by Peeves, who had jammed a door on the fourth floor shut and was refusing to let anyone pass until they set fire to their own pants, but Harry and Ron simply turned back and took one of their trusted shortcuts. Within five minutes, they were climbing through the portrait hole.

"Are you going to tell me what we're doing, then?" asked Ron, panting slightly.

"Up here," said Harry, and he crossed the common room and led the way through the door to the boys' staircase.

Their dormitory was, as Harry had hoped, empty. He flung open his trunk and began to rummage in it, while Ron watched impatiently.

"Harry ..."

"Malfoy's using Crabbe and Goyle as lookouts. He was arguing with Crabbe just

「われ、ここに誓う。われ、よからぬことを 企む者なり……少なくともマルフォイは企ん でる |

羊皮紙に「忍びの地図」がたちどころに現れた。

城の各階の詳細な図面が描かれ、城の住人の 名前がついた小さな黒い点が、図面の周りを 動き回っていた。

「マルフォイを探すのを手伝って」ハリーが 急き込んで言った。

ベッドに地図を広げ、ハリーはロンと二人で 覗き込んで探した。

「そこだ!」一 二分でロンが見つけた。

「スリザリンの談話室にいる。ほら……パー キンソン、ザビニクラップ、ゴイルと一緒だ ……」

ハリーはがっかりして地図を見下ろしたが、 すぐに立ち直った。

「よし、これからはマルフォイから目を離さないぞ」

ハリーは決然として言った。

「あいつがクラップとゴイルを見張りに立てて、どこかをうろついているのを見かけたら『透明マント』をかぶって、あいつが何しているかを突き止めにーー」

ネビルが入ってきたので、ハリーは口をつぐんだ。

ネビルは焼け焦げの臭いをプンプンさせながら、トランクを引っ掻き回して着替えのズボンを探しはじめた。

マルフォイの尻尾を押さえようと決意したに もかかわらず、何のチャンスもつかめないま ま一、二週間が過ぎた。

できるだけ頻繁に地図を見ていたし、ときには授業の合間に行きたくもないトイレに行ってまで調べたが、マルフォイが怪しげな場所 にいるのを一度も見かけなかった。

もっとも、クラップやゴイルが、いつもより 頻繁に二人きりで城の中を歩き回ったりーと きには人気のない廊下にじっとしていたりす るのを見つけたものの、そういうときに、マ ルフォイは二人の近くにいないばかりか、地 図のどこにいるのやら、まったく見つからな かった。 now. I want to know — aha."

He had found it, a folded square of apparently blank parchment, which he now smoothed out and tapped with the tip of his wand.

"I solemnly swear that I am up to no good ... or Malfoy is anyway."

At once, the Marauder's Map appeared on the parchment's surface. Here was a detailed plan of every one of the castle's floors and, moving around it, the tiny, labeled black dots that signified each of the castle's occupants.

"Help me find Malfoy," said Harry urgently.

He laid the map upon his bed, and he and Ron leaned over it, searching.

"There!" said Ron, after a minute or so. "He's in the Slytherin common room, look ... with Parkinson and Zabini and Crabbe and Goyle ..."

Harry looked down at the map, disappointed, but rallied almost at once.

"Well, I'm keeping an eye on him from now on," he said firmly. "And the moment I see him lurking somewhere with Crabbe and Goyle keeping watch outside, it'll be on with the old Invisibility Cloak and off to find out what he's —"

He broke off as Neville entered the dormitory, bringing with him a strong smell of singed material, and began rummaging in his trunk for a fresh pair of pants.

Despite his determination to catch Malfoy out, Harry had no luck at all over the next couple of weeks. Although he consulted the map as often as he could, sometimes making unnecessary visits to the bathroom between これは不思議千万だった。

マルフォイが実は学校の外に出ているという可能性をちらりと考えてもみたが、厳戒体制の敷かれた城で、そんなことができるとは考えられなかった。

地図上の何百という小さな黒い点に紛れて、 マルフォイを見失ったのだろうと考えるしか なかった。

これまではいつもくっついていたマルフォイ、クラップ、ゴイルが、ばらばらな行動を取っている様子なのは、それぞれが成長したからだろうーーロンとハーマイオニーがそのいい例だと思うと、ハリーは悲しい気持ちになった。

二月が三月に近づいたが、天気は相変わらず だった。

しかも、雨だけでなく風までも強くなった。 談話室の掲示板に、次のホグズミード行きは 取り消しという掲示が出たときには、全員が 憤慨した。

ロンはカンカンだった。

「僕の誕生日だぞ!」ロンが言った。

「楽しみにしてたのに!」

「だけど、そんなに驚くようなことでもない だろう?」ハリーが言った。

「ケイティのことがあったあとだし」 ケイティはまだ「聖マンゴ病院」から戻って いなかった。

その上、「日刊予言者」には行方不明者の記事がさらに増え、その中にはホグワーツの生徒の親戚も何人かいた。

「だけど、ほかに期待できるものって言えば、バカバカしい『姿現わし』しかないんだぜ!」ロンがぶつくさ言った。

「すごい誕生日祝いだよ…?」

三回目の練習が終わっても、「姿現わし」は 相変わらず難しく、何人かが「ばらけ」おお せただけだった。

焦燥感が高まると、ウィルキー トワイクロスと口癖の「3S」に対する多少の反感が出てきて、トワイクロスの「3S」に刺激された綽名がたくさんついた。

ドンクサ、ドアホなどはまだましなほうだっ た。

三月一日の朝、ハリーもロンも、シェーマス

lessons to search it, he did not once see Malfoy anywhere suspicious. Admittedly, he spotted Crabbe and Goyle moving around the castle on their own more often than usual, sometimes remaining stationary in deserted corridors, but at these times Malfoy was not only nowhere near them, but impossible to locate on the map at all. This was most mysterious. Harry toyed with the possibility that Malfoy was actually leaving the school grounds, but could not see how he could be doing it, given the very high level of security now operating within the castle. He could only suppose that he was missing Malfoy amongst the hundreds of tiny black dots upon the map. As for the fact that Malfoy, Crabbe, and Goyle appeared to be going their different ways when they were usually inseparable, these things happened as people got older — Ron and Hermione, Harry reflected sadly, were living proof.

February moved toward March with no change in the weather except that it became windy as well as wet. To general indignation, a sign went up on all common room notice boards that the next trip into Hogsmeade had been canceled. Ron was furious.

"It was on my birthday!" he said. "I was looking forward to that!"

"Not a big surprise, though, is it?" said Harry. "Not after what happened to Katie."

She had still not returned from St. Mungo's. What was more, further disappearances had been reported in the *Daily Prophet*, including several relatives of students at Hogwarts.

"But now all I've got to look forward to is stupid Apparition!" said Ron grumpily. "Big birthday treat ..."

Three lessons on, Apparition was proving as

とディーンがドタバタと朝食に下りていく音 で起こされた。

「誕生日おめでとう、ロン」ハリーが言っ た。

「プレゼントだ」

ハリーがロンのベッドに放り投げた包みは、 すでに小高く積み上げられていたプレゼント の山に加わった。

夜のうちに屋敷しもべ妖精が届けたのだろうと、ハリーは思った。

「あんがと」

ロンが眠そうに言った。

ロンが包み紙を破り取っている間にハリーは ベッドから起き出しトランクを開けて、隠し ておいた「忍びの地図」を探った。

毎回使ったあとは、そこに隠しておいたのだ。

トランクの中身を半分ほど引っくり返し、丸めたソックスの下に隠れていた地図をやっと見つけた。

ソックスの中には、幸運をもたらす魔法薬、 フェリックス フェリシスの瓶がいまもしま ってある。

「よし」

ハリーはひとり言を言いながら地図をベッドに持ち帰り、ちょうどそのとき、ハリーのベッドの足側を通り過ぎていたネビルに聞こえないように、杖でそっと叩きながら呪文を呟いた。

「われ、ここに誓う。われ、よからぬことを 企む者なり」

「ハリー、いいぞ!」

ロンは、ハリーが贈った真新しいクィディッチ キーパーのグローブを振りながら、興奮していた。

「そりゃよかった」

ハリーは、マルフォイを探してスリザリン寮 を克明に見ていたので、上の空の返事をし た。

「おい……やつはベッドにいないみたいだぞ ……」

ロンはプレゼントの包みを開けるのに夢中 で、答えなかった。

ときどきうれしそうな声を上げていた。

「今年はまったく大収穫だ!」

difficult as ever, though a few more people had managed to Splinch themselves. Frustration was running high and there was a certain amount of ill-feeling toward Wilkie Twycross and his three D's, which had inspired a number of nicknames for him, the politest of which were Dogbreath and Dunghead.

"Happy birthday, Ron," said Harry, when they were woken on the first of March by Seamus and Dean leaving noisily for breakfast. "Have a present."

He threw the package across onto Ron's bed, where it joined a small pile of them that must, Harry assumed, have been delivered by house-elves in the night.

"Cheers," said Ron drowsily and, as he ripped off the paper, Harry got out of bed, opened his own trunk, and began rummaging in it for the Marauder's Map, which he hid after every use. He turfed out half the contents of his trunk before he found it hiding beneath the rolled-up socks in which he was still keeping his bottle of lucky potion, Felix Felicis.

"Right," he murmured, taking it back to bed with him, tapping it quietly and murmuring, "I solemnly swear that I am up to no good," so that Neville, who was passing the foot of his bed at the time, would not hear.

"Nice one, Harry!" said Ron enthusiastically, waving the new pair of Quidditch Keeper's gloves Harry had given him.

"No problem," said Harry absentmindedly, as he searched the Slytherin dormitory closely for Malfoy. "Hey ... I don't think he's in his bed. ..."

Ron did not answer; he was too busy

ロンは、高そうな金時計を掲げながら大声で 言った。

時計は縁に奇妙な記号がついていで、針の代わりに小さな星が動いていた。

「ほら、パパとママからの贈り物を見たか? おっどろき一、来年もう一回成人になろうかな……」

「すごいな」

ハリーはいっそう丹念に地図を調べながら、 ロンの時計をちらりと見て気のない相槌を打った。

マルフォイほどこなんだ? 大広間のスリザリンのテーブルで朝食を食べている様子もない……研究室に座っているスネイプの近くにも見当たらない……どのトイレにも、医務室にもいない……。

「一つ食うか?」

大鍋チョコレートの箱を差し出しながら、ロンがモグモグ言った。

「いいや」ハリーは目を上げた。

「マルフォイがまた消えた!」

「そんなはずない」

ロンはベッドを滑り降りて服を着ながら、二つ目の大鍋チョコを口に押し込んでいた。

「さあ、急がないと、空っ腹で『姿現わし』 する羽目になるぞ……もっとも、そのほうが 簡単かも……」

ロンは、大鍋チョコレートの箱を思案顔で見 たが、肩をすくめて三個目を食べた。

ハリーは、杖で地図を叩き、まだ完了していなかったのに「いたずら完了」と唱えた。 それから服を着ながら、必死で考えた。

マルフォイがときどき姿を消すことには、必ず何か説明がつくはずだ。

しかし、ハリーにはさっぱり思いつかない。いちばんいいのはマルフォイのあとを追けることだが、「透明マント」があるにせよ、これは現実的な案ではない。

授業はあるし、クィディッチの練習やら宿題 やら「姿現わし」の練習まである。

一日中学校内でマルフォイを追け回していた ら、どうしたってハリーの欠席が問題視され てしまう。

「行こうか?」ハリーがロンに声をかけた。 寮のドアまで半分ほど歩いたところで、ハリ unwrapping presents, every now and then letting out an exclamation of pleasure.

"Seriously good haul this year!" he announced, holding up a heavy gold watch with odd symbols around the edge and tiny moving stars instead of hands. "See what Mum and Dad got me? Blimey, I think I'll come of age next year too. ..."

"Cool," muttered Harry, sparing the watch a glance before peering more closely at the map. Where was Malfoy? He did not seem to be at the Slytherin table in the Great Hall, eating breakfast. ... He was nowhere near Snape, who was sitting in his study. ... He wasn't in any of the bathrooms or in the hospital wing. ...

"Want one?" said Ron thickly, holding out a box of Chocolate Cauldrons.

"No thanks," said Harry, looking up. "Malfoy's gone again!"

"Can't have done," said Ron, stuffing a second Cauldron into his mouth as he slid out of bed to get dressed. "Come on, if you don't hurry up, you'll have to Apparate on an empty stomach. ... Might make it easier, I suppose ..." Ron looked thoughtfully at the box of Chocolate Cauldrons, then shrugged and helped himself to a third.

Harry tapped the map with his wand, muttered, "Mischief managed," though it hadn't been, and got dressed, thinking hard. There had to be an explanation for Malfoy's periodic disappearances, but he simply could not think what it could be. The best way of finding out would be to tail him, but even with the Invisibility Cloak this was an impractical idea: Harry had lessons, Quidditch practice, homework, and Apparition; he could not follow Malfoy around school all day without

一は、ロンがまだ動いていないのに気づいた。

ベッドの柱に寄り掛かり、奇妙にぼけっとした表情で、雨の打ちつける窓を眺めていた。 「ロン?朝食だ」

「腹へってない」ハリーは目を丸くした。 「たったいま、君、言ったじゃーー?」。

「ああ、わかった。一緒に行くよ」ロンはため息をついた。

「だけど、食べたくない」

ハリーは何事かと、ロンをよくよく観察した。

たったいま、大鍋チョコレートの箱を半分も 食べちゃったもんな?」

「そのせいじゃない」ロンはまたため息をついた。

「君には……君には理解できっこない」 「わかったよ」

さっぱりわからなかったが、ハリーは、ロンに背を向けて寮のドアを開けた。

「ハリー!」出し抜けにロンが呼んだ。 「何だい?」

「ハリー、僕、我慢できない!」 「何を?」

ハリーはこんどこそ何かおかしいと思った。 ロンは、かなり蒼い顔をして、いまにも吐き そうだった。

「どうしてもあの女のことを考えてしまうんだ!」ロンが、かすれ声で言った。

ハリーは唖然としてロンを見つめた。

こんなことになろうとは思わなかったし、そんな言葉は聞きたくなかったような気がする。

ロンとはたしかに友達だが、ロンがラベンダーを「ラブ ラブ」と呼びはじめるようなら、ハリーとしても断固とした態度を取らねばならない。

「それがどうして、朝食を食べないことにつ ながるんだ?」

事のなりゆきに、なんとか常識の感覚を持ち 込まねばと、ハリーが聞いた。

「あの女は、僕の存在に気づいていないと思 う」

ロンは絶望的な仕種をした。

「あの女は、君の存在にははっきり気づいて

his absence being remarked upon.

"Ready?" he said to Ron.

He was halfway to the dormitory door when he realized that Ron had not moved, but was leaning on his bedpost, staring out of the rainwashed window with a strangely unfocused look on his face.

"Ron? Breakfast."

"I'm not hungry."

Harry stared at him.

"I thought you just said —?"

"Well, all right, I'll come down with you," sighed Ron, "but I don't want to eat."

Harry scrutinized him suspiciously.

"You've just eaten half a box of Chocolate Cauldrons, haven't you?"

"It's not that," Ron sighed again. "You ... you wouldn't understand."

"Fair enough," said Harry, albeit puzzled, as he turned to open the door.

"Harry!" said Ron suddenly.

"What?"

"Harry, I can't stand it!"

"You can't stand what?" asked Harry, now starting to feel definitely alarmed. Ron was rather pale and looked as though he was about to be sick.

"I can't stop thinking about her!" said Ron hoarsely.

Harry gaped at him. He had not expected this and was not sure he wanted to hear it. Friends they might be, but if Ron started calling Lavender "Lav-Lav," he would have to put his foot down.

"Why does that stop you having breakfast?" Harry asked, trying to inject a note of common

いるよし

ハリーは戸惑った。

「しょっちゅう君にイチャついてるじゃない か?」

ロンは目をパチクリさせた。

「誰のこと言ってるんだ?」

「君こそ誰の話だ?」ハリーが聞き返した。 この会話はまったく辻複が合っていないとい う気持が、だんだん強くなっていた。

「ロミルダ ペイン」

ロンは優しく言った。

そのとたん、ロンの顔が、混じりけのない太陽光線を受けたように、パッと輝いたように見えた。

二人はまるまる一分間見つめ合った。そして ハリーが口を開いた。

「冗談だろう? 冗談言うな」

「僕……ハリー、僕、あの女を愛していると 思う」ロンが首を絞められたような声を出し た。

「オッケー」

ハリーは、ロンのぼんやりした目と蒼白い顔 をよく見ようと、ロンに近づいた。

「オッケー……もう一度真顔で言ってみろ よ」

「愛してる」ロンは息を弾ませながら言った。

「あの女の髪を見たか? まっ黒でつやつやして、絹のように滑らかで……それにあの目はどうだ? ぱっちりした黒い目は? そしてあの女の――」

「いい加減にしろ」ハリーはイライラした。 「冗談はもうおしまいだ。いいか? もうやめ ろ」

ハリーは背を向けて立ち去りかけたが、ドア に向かって三歩と行かないうちに、右耳にガ ツンと一発食らった。

ハリーがよろけながら振り返ると、ロンが拳 を構えていた。

顔が怒りで歪み、またしてもパンチを食らわ そうとしていた。

ハリーは本能的に動いた。

ポケットから杖を取り出し、何も意識せず に、思いついた呪文をとな唱えた。

「レビコーパス!」

sense into the proceedings.

"I don't think she knows I exist," said Ron with a desperate gesture.

"She definitely knows you exist," said Harry, bewildered. "She keeps snogging you, doesn't she?"

Ron blinked. "Who are you talking about?"

"Who are *you* talking about?" said Harry, with an increasing sense that all reason had dropped out of the conversation.

"Romilda Vane," said Ron softly, and his whole face seemed to illuminate as he said it, as though hit by a ray of purest sunlight.

They stared at each other for almost a whole minute, before Harry said, "This is a joke, right? You're joking."

"I think ... Harry, I think I love her," said Ron in a strangled voice.

"Okay," said Harry, walking up to Ron to get a better look at the glazed eyes and the pallid complexion, "okay... Say that again with a straight face."

"Have you seen her hair, it's all black and shiny and silky ... and her eyes? Her big dark eyes? And her —"

"This is really funny and everything," said Harry impatiently, "but joke's over, all right? Drop it."

He turned to leave; he had got two steps toward the door when a crashing blow hit him on the right ear. Staggering, he looked around. Ron's fist was drawn right back; his face was contorted with rage; he was about to strike again.

Harry reacted instinctively; his wand was out of his pocket and the incantation sprang to ロンは悲鳴を上げ、またしても踝からひねり 上げられて逆さまにぶら下がり、ローブがダ ラリと垂れた。

「何の恨みがあるんだ?」ハリーが怒鳴った。

「君はあの女を侮辱した! ハリー! 冗談だなんて言った! 」

ロンが叫んだ。

血が一度に頭に下がって、顔色が徐々に紫色 になっていた。

「まともじゃない!」ハリーが言った。

「いったい何に取り憑かれたーー?」

そのときふと、ロンのベッドで開けっぱなし になっている箱が目についた。

事の真相が、暴走するトロール並みの勢いで 閃いた。

「その大鍋チョコレートを、どこで手に入れた? |

「僕の誕生プレゼントだ!」ロンは体を自由 にしょうともがいて、空中で大きく回転しな がら叫んだ。

「君にも一つやるって言ったじゃないか?」 「さっき床から拾った。そうだろう?」

「僕のベッドから落ちたんだ。わかったら下ろせ!」

「君のベッドから落ちたんじゃない。このマヌケ、まだわからないのか? それは僕のだ。地図を探してたとき、僕がトランクから放り出したんだ。クリスマスの前にロミルダが僕にくれた大鍋チョコレート。全部惚れ薬が仕込んであったんだ!」

しかし、これだけ言っても、ロンには一言し か頭に残らなかったようだ。

「ロミルダ?」ロンが繰り返した。

「ロミルダって言ったか? ハリーーーあの女を知っているのか? 紹介してくれないか?」ハリーは、こんどは期待ではち切れそうになった宙吊りのロンの顔をまじまじと見て、笑い出したいのをぐっとこらえた。

頭の一部では一一特にズキズキする右耳のあたりが一一ロンを下ろしてやり、ロンが突進していくのを薬の効き目が切れるまで見物してみたいと思った……しかし、何と言っても、二人は友達じゃないか。

攻撃したときのロンは、自分が何をしている

mind without conscious thought: Levicorpus!

Ron yelled as his heel was wrenched upward once more; he dangled helplessly, upside down, his robes hanging off him.

"What was that for?" Harry bellowed.

"You insulted her, Harry! You said it was a joke!" shouted Ron, who was slowly turning purple in the face as all the blood rushed to his head.

"This is insane!" said Harry. "What's got into — ?"

And then he saw the box lying open on Ron's bed, and the truth hit him with the force of a stampeding troll.

"Where did you get those Chocolate Cauldrons?"

"They were a birthday present!" shouted Ron, revolving slowly in midair as he struggled to get free. "I offered you one, didn't I?"

"You just picked them up off the floor, didn't you?"

"They'd fallen off my bed, all right? Let me go!"

"They didn't fall off your bed, you prat, don't you understand? They were mine, I chucked them out of my trunk when I was looking for the map, they're the Chocolate Cauldrons Romilda gave me before Christmas, and they're all spiked with love potion!"

But only one word of this seemed to have registered with Ron.

"Romilda?" he repeated. "Did you say Romilda? Harry — do you know her? Can you introduce me?"

Harry stared at the dangling Ron, whose face now looked tremendously hopeful, and のかわからなかったのだ。

ロンがロミルダ ペインに永遠の愛を告白するようなまねをさせたりしたら、自分はもう一度パンチを食らうに値すると、ハリーは思った。

「ああ、紹介してやるよ」

ハリーは忙しく考えをめぐらせながら言った。

「それじゃ、いま、下ろしてやるからな。いいか? |

ハリーは、ロンが床にわざと激突するように下ろした(なにしろハリーの耳は、相当痛んでいた)。

しかし、ロンは何でもなさそうに、ニコニコ して弾むように立ち上がった。

「ロミルダは、スラグホーンの部屋にいるはずだ」

ハリーは先に立ってドアに向かいながら、自信たっぷりに言った。

「どうしてそこにいるんだい?」ロンは急い で追いつきながら、心配そうに聞いた。

「ああ、魔法薬の特別授業を受けている」ハリーはいい加減にでっち上げて答えた。

「一緒に受けられないかどうか、頼んでみょうかな?」ロンが意気込んで言った。

「いい考えだ」ハリーが言った。

肖像画の穴の横で、ラベンダーが待ってい た。

ハリーの予想しなかった、複雑な展開だ。

「遅いわ、ウォン ウォン!」 ラベンダーが 唇を尖らせた。

「お誕生日にあげょうと思ってーー」「ほっといてくれ」ロンがイライラと言った。

「ハリーが僕を、ロミルダ ペインに紹介してくれるんだ」

それ以上一言も言わず、ロンは肖像画の穴に 突進して出ていった。

ハリーは、ラベンダーにすまなそうな顔を見せたつもりだったが、「太った婦人」が二人の背後でピシャリと閉じる直前、ラベンダーがますますむくれ顔になっていたことから考えると、ただ単に愉快そうな表情になっていたのかもしれない。

スラグホーンが朝食に出ているのではないか と、ハリーはちょっと心配だったが、ドアを fought a strong desire to laugh. A part of him—the part closest to his throbbing right ear—was quite keen on the idea of letting Ron down and watching him run amok until the effects of the potion wore off. ... But on the other hand, they were supposed to be friends, Ron had not been himself when he had attacked, and Harry thought that he would deserve another punching if he permitted Ron to declare undying love for Romilda Vane.

"Yeah, I'll introduce you," said Harry, thinking fast. "I'm going to let you down now, okay?"

He sent Ron crashing back to the floor (his ear did hurt quite a lot), but Ron simply bounded to his feet again, grinning.

"She'll be in Slughorn's office," said Harry confidently, leading the way to the door.

"Why will she be in there?" asked Ron anxiously, hurrying to keep up.

"Oh, she has extra Potions lessons with him," said Harry, inventing wildly.

"Maybe I could ask if I can have them with her?" said Ron eagerly.

"Great idea," said Harry.

Lavender was waiting beside the portrait hole, a complication Harry had not foreseen.

"You're late, Won-Won!" she pouted. "I've got you a birthday —"

"Leave me alone," said Ron impatiently. "Harry's going to introduce me to Romilda Vane."

And without another word to her, he pushed his way out of the portrait hole. Harry tried to make an apologetic face to Lavender, but it might have turned out simply amused, because she looked more offended than ever as the Fat 一回叩いただけで、緑のビロードの部屋着に、お揃いのナイトキャップをかぶったスラグホーンが、かなり眠そうな目をして現れた。

「ハリー」スラグホーンがブツプツ言った。 「訪問には早すぎるね……土曜日はだいたい 遅くまで寝ているんだが……」

「先生、お邪魔して本当にすみません」 ハリーはなるべく小さな声で言った。

ロンは爪先立ちになって、スラグホーンの頭 越しに部屋を覗こうとしていた。

「でも、友達のロンが、間違って惚れ薬を飲んでしまったんです。先生、解毒剤を調合してくださいますよね?マダム ボンフリーのところに連れていこうと思ったんですが、ウィズリー ウィザード ウィーズからは何も買ってはいけないことになっているから、あの一都合の悪い質問なんかされると……

「君なら、ハリー、君ほどの魔法薬作りの名 手なら、治療薬を調合できたのじゃないか ね? |

「えーと」

ロンが無理やり部屋に入ろうとして、こんどはハリーの脇腹を小突いているので、ハリーは気が散った。

「あの、先生、僕は惚れ薬の解毒剤を作ったことがあくませんし、ちゃんと出来上がるまでに、ロンが何か大変なことをしでかしたりすると——」

うまい具合に、ちょうどそのときロンが叩いた。

「あの女がいないよ、ハリーーーこの人が隠してるのか?」

「その薬は使用期限内のものだったかね?」 スラグホーンは、こんどは専門家の目でロン を見ていた。

「いやなに、長く置けば置くほど強力になる 可能性があるのでね」

「それでよくわかりました」

スラグホーンを叩きのめしかねないロンと、 いまや本気で格闘しながら、ハリーが喘ぎ喘 ぎ

「先生、今日はこいつの誕生日なんです」ハ リーが懇願した。

「ああ、よろしい。それでは入りなさい。さ

Lady swung shut behind them.

Harry had been slightly worried that Slughorn might be at breakfast, but he answered his office door at the first knock, wearing a green velvet dressing gown and matching nightcap and looking rather blearyeyed.

"Harry," he mumbled. "This is very early for a call. ... I generally sleep late on a Saturday. ..."

"Professor, I'm really sorry to disturb you," said Harry as quietly as possible, while Ron stood on tiptoe, attempting to see past Slughorn into his room, "but my friend Ron's swallowed a love potion by mistake. You couldn't make him an antidote, could you? I'd take him to Madam Pomfrey, but we're not supposed to have anything from Weasleys' Wizard Wheezes and, you know ... awkward questions ..."

"I'd have thought you could have whipped him up a remedy, Harry, an expert potioneer like you?" asked Slughorn.

"Er," said Harry, somewhat distracted by the fact that Ron was now elbowing him in the ribs in an attempt to force his way into the room, "well, I've never mixed an antidote for a love potion, sir, and by the time I get it right, Ron might've done something serious —"

Helpfully, Ron chose this moment to moan, "I can't see her, Harry — is he hiding her?"

"Was this potion within date?" asked Slughorn, now eyeing Ron with professional interest. "They can strengthen, you know, the longer they're kept."

"That would explain a lot," panted Harry, now positively wrestling with Ron to keep him from knocking Slughorn over. "It's his あ」スラグホーンが和らいだ。

「わたしのカバンに必要な物がある。難しい 解毒剤ではない……」

ロンは猛烈な勢いで、暖房の効きすぎた、ご てごてしたスラグホーンの部屋に飛び込んだ が、房飾りつきの足置き台につまずいて転び かけ、ハリーの首根っこにつかまってやっと 立ち直った。

「あの女は見てなかっただろうな?」とロン が呟いた。

「あの女は、まだ来ていないよ」 スラグホーンが魔法薬キットを開けて、小さなクリスタルの瓶に、あれこれ少しずつ摘まんでは加えるのを見ながら、ハリーが言った。

「よかった」ロンが熱っぽく言った。

「僕、どう見える?」

「とても男前だ」

スラグホーンが、透明な液体の入ったグラス をロンに渡しながら、よどみなく言った。

「さあ、これを全部飲みなさい。神経強壮剤 だ。彼女が来たとき、それ、君が落ち着いて いられるようにね」

「すごい」ロンは張り切って、解毒剤をズルズルと派手な音を立てながら飲み干した。 ハリーもスラグホーンもロンを見つめた。 しばらくの問、ロンは二人にニッコリ笑いかけていたが、やがてニッコリはゆっくりと引っ込み、消え去って、極端な恐怖の表情と入れ替わった。

「どうやら、元に戻った?」ハリーはニヤッと笑った。

スラグホーンはクスクス笑っていた。

「先生、ありがとうございました」

「いやなに、かまわん、かまわん」

打ちのめされたような顔で、そばの肘掛椅子 に倒れ込むロンを見ながら、スラグホーンが 言った。

「気つけ薬が必要らしいな」スラグホーンが、こんどは飲み物でびっしりのテーブルに 急ぎながら言った。

「バタービールがあるし、ワインもある。オーク樽熟成の蜂蜜酒は最後の一本だ……ウーム……ダンブルドアにクリスマスに贈るつもりだったが……まあ、それは……」

birthday, Professor," he added imploringly.

"Oh, all right, come in, then, come in," said Slughorn, relenting. "I've got the necessary here in my bag, it's not a difficult antidote. ..."

Ron burst through the door into Slughorn's overheated, crowded study, tripped over a tasseled footstool, regained his balance by seizing Harry around the neck, and muttered, "She didn't see that, did she?"

"She's not here yet," said Harry, watching Slughorn opening his potion kit and adding a few pinches of this and that to a small crystal bottle.

"That's good," said Ron fervently. "How do I look?"

"Very handsome," said Slughorn smoothly, handing Ron a glass of clear liquid. "Now drink that up, it's a tonic for the nerves, keep you calm when she arrives, you know."

"Brilliant," said Ron eagerly, and he gulped the antidote down noisily.

Harry and Slughorn watched him. For a moment, Ron beamed at them. Then, very slowly, his grin sagged and vanished, to be replaced by an expression of utmost horror.

"Back to normal, then?" said Harry, grinning. Slughorn chuckled. "Thanks a lot, Professor."

"Don't mention it, m'boy, don't mention it," said Slughorn, as Ron collapsed into a nearby armchair, looking devastated. "Pick-me-up, that's what he needs," Slughorn continued, now bustling over to a table loaded with drinks. "I've got butterbeer, I've got wine, I've got one last bottle of this oak-matured mead ... hmm ... meant to give that to Dumbledore for Christmas ... ah, well ..." He shrugged. "He

_____ スラグホーンは肩をすくめた。

「……もらっていなければ、別に残念とは思わないだろう! いま開けて、ミスター ウィーズリーの誕生祝いといくかね? 失恋の痛手を追い払うには、上等の酒に勝るものなし……」

スラグホーンはまたうれしそうに笑い、ハリーも一緒に笑った。

真実の記憶を引き出そうとして大失敗したあのとき以来、スラグホーンとほとんど二人だけになったのは、初めてだった。

スラグホーンの上機嫌を続けさせることができれば、もしかして……オーク樽熟成の蜂蜜酒をたっぷり飲み交わしたあとで、もしかしたら……。

「そ-ら」

スラグホーンがハリーとロンにそれぞれグラスを渡し、それから自分のグラスを挙げて言った。

「さあ、誕生日おめでとう、ラルフーー」 「ーーロンですーー」ハリーが囁いた。

しかしロンは、乾杯の音頭が耳に入らなかったらしく、とっくに蜂蜜酒を口に放り込み、ゴクリと飲んでしまった。

ほんの一瞬だった。心臓が一鼓動する間もなかった。

ハリーは何かとんでもないことが起きたのに 気づいた。

スラグホーンは、どうやら気づいていない。 「--いついつまでも健やかで--」

「ロン!」

ロンは、グラスをポトリと落とした。椅子から立ち上がりかけたとたん、グシャリと崩れ、手足が激しく疫撃しはじめた。

口から抱を吸き、両眼が飛び出している。

「先生!」ハリーが大声を上げた。

「何とかしてください!」

しかし、スラグホーンは、衝撃で唖然とする ばかりだった。

ロンはピクビク疫撃し、息を詰まらせた。 皮膚が紫色になってきた。

「いったいーーしかしーー」スラグホーンは しどろもどろだった。

ハリーは低いテーブルを飛び越して、開けっぱなしになっていたスラグホーンの魔法薬キ

can't miss what he's never had! Why don't we open it now and celebrate Mr. Weasley's birthday? Nothing like a fine spirit to chase away the pangs of disappointed love. ..."

He chortled again, and Harry joined in. This was the first time he had found himself almost alone with Slughorn since his disastrous first attempt to extract the true memory from him. Perhaps, if he could just keep Slughorn in a good mood ... perhaps if they got through enough of the oak-matured mead ...

"There you are then," said Slughorn, handing Harry and Ron a glass of mead each before raising his own. "Well, a very happy birthday, Ralph—"

"Ron —" whispered Harry.

But Ron, who did not appear to be listening to the toast, had already thrown the mead into his mouth and swallowed it.

There was one second, hardly more than a heartbeat, in which Harry knew there was something terribly wrong and Slughorn, it seemed, did not.

"— and may you have many more —"
"Ron!"

Ron had dropped his glass; he half-rose from his chair and then crumpled, his extremities jerking uncontrollably. Foam was dribbling from his mouth, and his eyes were bulging from their sockets.

"Professor!" Harry bellowed. "Do something!"

But Slughorn seemed paralyzed by shock. Ron twitched and choked: His skin was turning blue.

"What — but —" spluttered Slughorn.

Harry leapt over a low table and sprinted

ットに飛びつき、瓶や袋を引っぱり出した。 その間も、ゼイゼイというロンの恐ろしい断 末魔の息遣いが聞こえていた。

やっと見つけた――魔法薬の授業でスラグホーンがハリーから受け取った、萎びた肝臓のような石だ。

ハリーはロンのそばに飛んで戻り、顎をこじ開け、ベゾアール石を口に押し込んだ。 ロンは大きく身震いしてゼーッと息を吐き、 ぐったりと静かになった。 toward Slughorn's open potion kit, pulling out jars and pouches, while the terrible sound of Ron's gargling breath filled the room. Then he found it — the shriveled kidneylike stone Slughorn had taken from him in Potions.

He hurtled back to Ron's side, wrenched open his jaw, and thrust the bezoar into his mouth. Ron gave a great shudder, a rattling gasp, and his body became limp and still.